



人権学習(ハンセン病について)

10月3日(月)、3年生人権学習の一環でハンセン病学習のまとめとして今回、機会に恵まれ中修一様にお話をいただきました。中さんは、昭和17(1942)年に鹿児島県の奄美大島で生まれ、10歳の時にハンセン病を発病し、中学校卒業後に国立ハンセン病療養所奄美和光園に入所。その後、一度社会復帰されますが再発し、熊本県の菊池恵楓園に入所。そして平成14(2002)年に再び社会復帰を遂げ、現在は様々なところでハンセン病の語り部として差別の根絶を目指し、啓発をされています。話の内容は

- ①新型コロナウイルス感染症とハンセン病の共通点や相違点
- ②病気に対する世界の動きと日本の動き
- ③差別意識の作られ方について
- ④自分の中学時代と今を比較して

など幅広い話をいただきました。差別のある社会で、自分に非はなくても、嘘をつかないと暮らして(生きて)いけない経験をしたことから、3年生のみなさんには「国の宝、将来の宝であるみなさんには、誰もが嘘をつかなくても生きていける社会を創ってほしい」という願いを最後に話されました。

SNS等で真実と嘘が玉石混淆の現在、嘘の情報に惑わされ、差別の加担者にならないようにしっかり考え、行動しなければと改めて思いました。



学習成果発表会に向けて

10月21日(金)に学習成果発表会を行います。

過去2年間はコロナ対策の制限を強く行う必要があったので合唱コンクールのみを午後実施しました。保護者の皆さまの参観も各学年、発表の時間で区切って、学年毎にローテーションをしていただきました。

今年はwithコロナを意識した行事対応に変わってきたため、1年生や2年生の体験学習、修学旅行等での総合的な学習もいっくら出来るようになりました。そのため、今年は給食をはさんで午前中に各学年の学習発表を合わせて1時間程度、午後に昨年のような合唱コンクールを行う予定です。



つきましては、本日別紙配付の事前プリント「学習成果発表会について(お知らせ)」で保護者様の参加予定をお聞きして、当日の保護者様の参観につきましては計画を立て、後日お知らせします。ご協力をよろしくお願い致します。

じんけん 人権について考えています

学校では人権について生徒と一緒に考えています。
さまざまな人権についての課題がありますが、先日、全国

じんけんようごいじんれんごうかい
人権擁護委員連合会から「種をまこう」という作品集が届きました。作品を紹介していきます。

「ありのままに自分らしく生きる」

皆さんは『自分の性のあり方』について考えたことがありますか。中学二年の私だって一年前までは関心がありませんでした。「人間は、男性と女性のどちらかで、しかもそれは生まれた時から決まっているものだ」と祖母や母に言われながら育ってきました。私は小学生の頃は『男らしさ』『女らしさ』って「何?」とあまり意識していませんでした。

そういえばかつて母と言い争いをしたことがあります。母と一緒にご飯用の茶碗を買いに出かけた時のことです。母はしきりに柄もかわいくやさしい色の茶碗を選んで、「すごく女の子らしくていいわよ」など自分の好みを一生懸命私にすすめてきました。しかし、ことごとく、私の中で却下されました。「ほんとに困った子だわ、私と好みが全く違う」見かねた店員さんが「娘さんが毎日使うお茶碗ですから」と取りなしてくれ、しぶしぶ母は私好みの茶碗を買ったのです。その濃い藍色に焦げ茶模様の模様の大ぶりの茶碗は大好きで、今も大切に毎日使っています。私自身、違和感を感じなかったのです。

ところが、その前提を覆すことが私自身に起きたのです。中学校入学のための制服の採寸の時でした。どうしても採寸のためにスカートをはくのが嫌でした。母に怒られながら嫌々スカートをはいて採寸をうけました。しかし、「絶対に似合わない」と確信しました。母が帰り道にぶつぶつ言い始めました。「どうしてあなたはいつもそうなの?母さんが買ってくる洋服は一度も着たのを見たことがないし、いつもTシャツとかGパンとか、まるで男の子みたいじゃないの!スカートの採寸を待つ間も、ものすごく不機嫌だったし、美智子ちゃんのママから『政子ちゃん機嫌悪いのね。大丈夫?』と聞かれたわよ。全く、恥ずかしいったらありゃしない!」私は心の中で「ズボンの制服はないのかな?」とつぶやきました。

中学一年生のある時、自分の部屋のクローゼットや洋服タンスの引き出しをながめてびっくりしました。女の子が好きそうな色のものが極端に少ないのです。以前は、母が服を選んで買ってきていました。しかし、私が母の選んだ服を着ようとしないうちに、いつの間にか母は私の洋服選びをやめてしまったのです。それからは、自分の服は自分で選ぶようにしていたのです。「えっ?私は男の子?イヤ違うよね。どこをどう見ても女の子でしょ。でも・・・でも・・・好みは完全に男の子?まさか・・・」考え始めると次第に何が何だか分からなくなってきました。

スカートの採寸の時、訳もなくどうしてもスカートを制服にしたくなかったこと・今もスカート通学が私にとって苦痛だという現実。学校でも何となく女の子同士の話でも、洋服や趣味の話では、つまらないと思うことが多かったのです。いつからこんなことになったのでしょうか。涙があふれて部屋の中が白くかすんで見えました。父や母には絶対に言えません。父や母は心配するに決まっているからです。私は精神的に完全に落ち込んでしまいました。すると余計にスカート通学が苦しくなっていました。「身体は女性なのに心は男性?まさかそんなことあり得ない!」私は大きな声で叫びました。「そんなこと、完全否定」

ついに私は『学校に行きたくない』と思うようになりました。理由はどうしてもスカート通学がイヤだったことと、心の中がメチャメチャに壊れていくような気持ちだったからです。さすがに父と母は心配し始めました。「体は何ともないから心配しないで、しばらくほっといて欲しい」私がそう言った時に、父が静かに話し始めました。「もしも、政子が無言のうちに悩んでいるのなら、話して欲しい。親は子どもが悩んだ時にこそ力になるべきだと父さんは思う。今の政子はいつもの明るい元気な政子ではない。相当な悩みを抱えているんだろうな、そう思うよ。もし、政子が父さんと母さんに心配かけるから言わない。と考えているのなら、完全に逆だよ。どうしても話したくないなら良いけどね」

この父の言葉を聞いたとたん、私の心から、あのつらい悩みが涙と一緒にあふれだしました。父と母は私と一緒に涙を流しながら黙って聞いていました。母が静かに言いました。「おかしいと思ったことが何度もあったの。その時にもっと聞いてあげれば良かった。ごめんね」そして、父がくれたアドバイスで私は救われたのです。「どこかで聞いたことがある。自分の体の性に違和感を持っている人への相談をしている専門機関があることを。」

父と母に付き添われ、私は専門の機関に相談に行きました。「政子さん、悩みを一緒に解決しましょうね。人間の性には『身体の性』と『心の性』があります。『身体の性』は分かりますよね。『心の性』は自分がどの性別を感じているかの性です。身体と心の性が一致している人もいれば違和感のある人もいます。人それぞれ違うのです。『女らしさ』『男らしさ』という固定した考えに捕らわれることはないのですよ。2020東京オリ・パラに向けて、いかなる種類の差別も許さないというオリンピック憲章にうたわれている人権尊重の理念が一層浸透した都市になることを目指し、性自認や性的指向を理由とする差別の解消等を推進しようという条例もできています。政子さん、自分らしさを大切に自分のよさとして自信を持って生きてください。」

この話を聞いて、私の胸の中は、スーッと軽くなりました。自分らしくありのままに生きていくことが大切と思うようになりました。そして、今の私は胸を張って毎日学校へ通っています。ズボンを選択できるようになったので、もちろんズボン姿で。性のありようは人それぞれです。その違いが自分らしさです。誰もが自分らしさを出せる社会になるといいです。